解説『河合社歌合』とその周辺

三好優希
吉井佐織

1．成立

『河合社歌合』は、寛元元年（一二四三）一一月十七日に成立し、下賀茂神社の摂社である河合神社に奉納されたものと思われる。佐藤恒雄氏は、『信実朝臣集』（一〇六）の詞書に「家にすすめ侍りし河合のやしろの歌合に、千鳥」とあることから、「おそらくは定家三回忌の秋八月二十日のころ」「信実が諸人に勧進して、判者を為家とすることで定家後の歌壇の統一を図った」ものと指摘されている。[1] 難陳の形跡が見られないことなどから、当座結番後日判もしくは机上結番の歌合に判を付し河合社に奉納したものと思しい。

（三好優希）

2．伝本状況と底本

佐藤恒雄氏の分類によれば、伝本は、第一類、第二類、第三類の三類に分類される。いずれも二十番判詞の途中が脱落しているが、三十番右の為継詠を欠き、判者巻末歌を持つものを第一類、逆に為継詠を持ち、判者巻末歌を持たないものを第二類、どちらも持つものを第三類とされている。

第一類

①彰考館文庫蔵（巳・一二）「河合社歌合」

②家郷隆文氏蔵「河合社歌合」

③国立公文書館内閣文庫蔵（二〇一・一七七）「河合社歌合」

④宮内庁書陵部蔵「歌合部類十五種」（一五一・三六一）所収「河合社歌合」

第二類

⑤京都女子大学国文学研究室蔵蘆庵本「歌合集」（九一一・一八・u九六）所収「河合社歌合」

⑥今治市河野美術館蔵蘆庵本「歌合集」（一二三三六一）所収「河合社歌合」

⑦刈谷市立図書館蔵蘆庵本「歌合集」（一六七一）所収「河合社歌合」

第三類

⑧慶応義塾大学附属図書館蔵（一四六・四六・一）「河合社歌合」

⑨東京大学国文学研究室蔵「歌合類纂」（中古一一・一八・一）所収「河合社歌合」

⑩京都女子大学附属図書館蔵谷山文庫（〇九〇・Ｔａ八八・三七九）「河合社歌合」

⑪群書類従巻第百九十九所収「河合社歌合」

⑫国文学研究資料館蔵「瑩玉集・鴨長明集他」（タ二八一）所収「河合社歌合」

太字は今回試注で取り上げた伝本であることを表す。『新編国歌大観』（第五巻歌合編）は④本を底本とするが、本試注では⑫本を底本とした。④本は本文の誤写や脱落が多くみえ、例えば作者の官職や左右の脱落、判詞での左右の誤写や判詞が諸本に比べ簡潔である。以下、④本を翻刻したものを挙げ、具体的にどういった誤写や脱落がみえるかを例示する。誤写や脱落が認められる箇所には傍線を付し、その箇所の校異を示した。

（例1）八番・冬月

八番

左持　　弁

木枯のふきもたゆまぬ夕暮に山のはさむく出る月影

散位藤原朝臣行家

冬河のよ[A]そ[B]まて月の影さえて下行水も猶氷りつゝ

左は、暮山にあらしさむく、右は、冬川に氷さえたり[C]景気、たゝ[D]ことに、いつれもおとりまさると申しかたし、猶為持

【校異】

A　ナシ―右（国・内・刈・河・家）　B　よそ―そこ（国・刈・河）　C　たり―たる（国・内・刈・河・家）

D　たゝことに―たえことに（内）、姿詞（国・刈・河）

（例1）に見える傍線部Aは「右」が脱落している。傍線部Bは「よそ」だと下の句と対応せず、諸本は多く「そこ」となっている。傍線部Cは名詞へ続くために連体形である「たる」が正しい形であり今回使用した諸本の全てが「たる」となっている。

（例2）二十二番・不遇恋

廿二番

左　　信実

徒に恋をしこふる我ためし岩にも松の種をやは見ん

右（かち）　　真観

身は捨つ今は此世に逢事を何にかへてか恋渡るらん
　左、初の五もしをよみあけ侍るより、
　作者により侍るを、詠吟し侍る
　ほとに、左の岩にも松のふるきた
　めしも、いたつら申おとし侍りぬる
　にや

【校異】

A　左―右（国・刈・河）　B　より侍る―よりてはことはりもかなひこゝろ言葉もゆうに侍る（国・刈・河）、よ□侍□（家）　C　いたつら―いたつらに（国・刈・河）

（例2）の傍線部Aは「右」の誤写と思われ、Bは一行分脱落したものとみえ、諸本によって補う必要がある。Cは左歌初句に響かせ判じていると思しく、諸本により「に」を補うべきである。

（例1）、（例2）と宮内庁書陵部蔵本の本文を確認してきた。今回取り上げた二例以外でも書陵部本文には多くの脱落や誤写などが認められるため底本には適していない。よって、試注では比較的脱落や誤写が少なく、また三十番右の為継詠と巻末の為家詠を有する第三類のうち国文学研究資料館蔵本を底本とした。

（三好優希）

3．出詠歌人

【左方】

前権大納言藤原朝臣為家

　権中納言藤原定家男。母は内大臣藤原実宗女。為氏・為教の父。建久九年（一一九八）生。建仁二年（一二〇二）五歳で叙爵。侍従、左中将、蔵人頭、参議、右衛門督などを経て、暦仁元年（一二三八）正二位、仁治二年（一二四一）

二月権大納言に至ったが、同年八月父定家の死去に伴い服解、以後復任できなかった。その後民部卿に任ぜられたが、康元元年（一二五六）五九歳の時、病により出家。法名融覚。建治元年（一二七五）没、七八歳。

公的な出詠は一五歳の時の建暦二年『内裏詩歌合』にはじまり、以後、同三年『内裏歌合』、承久元年『内裏百番歌合』、同『日吉社大宮歌合』などに出詠。建保期の順徳天皇歌壇において活動するが、歌道修業は怠りがちで父定家を嘆かせた。貞応二年（一二二三）二六歳の時、日吉社に参籠、五日間で『為家卿千首』を詠んで以降は歌人として本格的な活動に入り、貞永元年『光明峰寺摂政家歌合』、同『洞院摂政家百首』などに出詠。寛元元年（一二四三）四五歳の時に、『河合社歌合』で自身初の判者を勤める。定家没後は、西園寺家や信実の協力のもと歌壇の中心人物となるが、蓮性・真観らとは、徐々に対立を深めてゆき、反御子左派の旗揚げ的催しと目される寛元四年『春日若宮社歌合』の催行によってその対立は決定的となった。宝治元年『院御歌合』、『宝治百首』などに出詠、同歌合では判者も勤めている。建長三年（一二五一）には『続後撰和歌集』を単独で奏覧。さらに文永二年（一二六五）には、藤原家良・藤原基家・藤原行家・真観とともに『続古今和歌集』を撰進し、定家同様、二度の勅撰集撰者となる。同年以後、公式の雅事にあまり姿を見せなくなるが、『為家集』によると以後も作歌活動を続けていたことが窺える。晩年には阿仏尼を後妻に迎え、為相を溺愛し、二条・京極・冷泉三家分立の要因を生んだ。勅撰集には『新勅撰和歌集』以下、三三二首入集。家集に『為家集』、歌論書に『詠歌一体』などがある。

散位藤原朝臣信実

藤原隆信男。母は中務少輔藤原長重女。藻壁門院少将・弁内侍・後深草院少将内侍の父。安元二年（一一七六）年頃生。中務権大輔、備後守、左京権大夫を務め、正四位下に叙せられる。宝治二年（一二四八）出家か。法名寂西。文永二年（一二六五）頃、八九歳で没か。

最初の出詠は正治二年九月『院当座歌合』で、翌年には『正治後度百首』に出詠するが、『新古今和歌集』には入集しなかった。以降しばらく歌会・歌合に出席することはなかったが、四〇歳近くになって『内大臣道家家百首』に出詠し、歌壇に復帰。その後は『道助法親王家五十首和歌』、『洞院摂政家百首』など、様々な歌会・歌合・定数歌に出詠し、中堅歌人として成長していった。定家とは異母兄弟であり、為家は従兄弟にあたる。定家との親交は深く、多くの歌会・歌合

で同席したほか、『明月記』には来談した記事が多くみえ、定家に道家主催の歌会で提出する予定の百首歌を見せるなどしている（寛喜二年九月二十日条）。定家没後は、『河合社歌合』を勧進し、為家の歌壇的地位を確立するために尽力する一方で、反御子左派の旗上げ的催しである寛元四年『春日若宮社歌合』に出詠、また建長三年（一二五一）には真観と『閑窓撰歌合』を共撰するなど、反御子左派とも交流があり、中立派歌人として双方の緩衝的役割を果たした。宝治元年『院御歌合』、『宝治百首』、『弘長百首』、文永二年八月十五夜『歌合』などに出詠し、最晩年まで活躍した。勅撰集には『新勅撰和歌集』以下、一三二首入集。家集に『信実集』がある。似絵の名手としても名高いほか、『今物語』の編者と目されている。

左近衛権中将藤原朝臣光成

藤原（大炊御門）光俊男。母は河内守平繁雅女。生年未詳、弘安二年（一二七九、一説には同三年）没。『明月記』には父光俊が定家邸を来訪し、歓談する記事が多々みえる。また、嘉禄元年（一二二五）四月の除目の折には定家から賀札を贈られている（二十七日条）。寛元四年『春日若宮社歌合』、弘長三年『住吉社歌合』、『玉津島歌合』などに出詠。勅撰集には『続後撰和歌集』以下、九首入集。

左近衛権少将藤原朝臣為教

為家男。母は宇都宮頼綱（蓮生）女。兄に為氏。嘉禄三年（一二二七）生（『明月記』安貞元年閏三月二十日条）。弘安二年（一二七九）没、五三歳。仁治元年（一二四〇）正五位下、正元元年（一二五九）従三位、右兵衛督。文永五年（一二六八）従二位。

京極家の祖。歌合への出詠は『河合社歌合』が初めてと思しい。以後、宝治元年『院御歌合』、『弘安百首』などに出詠。兄の為氏とは不仲で、寛元から文永頃の反御子左派活躍期には文永二年七月『歌合』に参加するなど、ややそれに同調していた形跡がある。『白河殿七百首』、文永二年『亀山殿五首歌合』などに出詠。なお、「中将」と記載する本もみえるが、『経俊卿記』によると寛元四年（一二四六）の時点で為教は左少将と記されており、当該歌合催行時も中将ではなく少将であったと思われる。勅撰集には『続後撰和歌集』以下、三六首入集。

日吉祢宜祝部宿祢成茂

祝部允仲男。治承四年（一一八〇）生。日吉社祢宜、丹後守、大蔵少輔となる。正四位下。建長六年（一二五四）没、七五歳。

元久元年『春日社歌合』、建永元年『卿相侍臣歌合』、建保三年『院四十五番歌合』など、主に後鳥羽院歌壇で活躍した。承久の乱後も、寛喜四年『石清水若宮歌合』、寛元四年『春日若宮社歌合』、『宝治百首』、建長三年『影供歌合』などに出詠。『明月記』には定家邸への訪問の記事が散見し、『古今著聞集』には後嵯峨院と為家に七十賀を祝われた記事がみえるなど定家・為家との親交がうかがえるが、御子左派、反御子左派いずれにも属さない中立派歌人と目される。なお、建長五年（一二五三）には藤原定家十三回忌に為家が勧進した追善詩歌『二十八品並九品詩歌』に詠進している。勅撰集には『新古今和歌集』以下、四四首入集。家集に『成茂宿祢集』がある。

鷹司院兵衛督

鷹司院按察を指すか。鷹司院按察は権中納言藤原光親女。生没年未詳。真観・定嗣の妹。鷹司院長子に出仕。文永二年（一二六五）以前に出家か。

『宝治百首』、建長三年『影供歌合』などに出詠。真観と同じく『河合社歌合』催行以後、反御子左派に属する。勅撰集には『続後撰和歌集』以下、二一首入集。鷹司院帥が同時期に存在するため、そちらが当該歌合の出詠者の可能性もあるが、その場合、『葉黄記』宝治二年正月十八日条に「鷹司院帥〈右丞禅門息年十三〉」とあることから、当該歌合が行われた寛元元年（一二四三）時点で八歳となる。

藻壁門院少将

中宮少将とも。生没年未詳。藤原信実女。弁内侍・後深草院少将内侍の姉。寛喜元年（一二二九）頃から藻壁門院尊子（後堀河天皇の中宮）に出仕。

姉妹の中でも傑出していたらしく、定家は少将の「おのがねにつらきわかれはありとだに思ひもしらでとりやなくらむ」（『新勅撰和歌集』恋三・七九四・「（家に百首歌よませ侍りけるに）」）に感じて、『古今和歌集』を書写し、与えてい

る（『井蛙抄』雑談）。寛喜四年『石清水若宮歌合』、『洞院摂政家百首』、『光明峰寺摂政家歌合』などに出詠。勅撰集には『新勅撰和歌集』以下、六二首入集。

春宮弁

弁内侍。後深草院弁内侍とも。生没年未詳。文永二年（一二六五）までは生存。藤原信実女。姉に藻壁門院少将、妹に後深草院少将内侍。寛元元年（一二四三）、後深草天皇立太子の時に弁の名で出仕し、同四年（一二四六）、内侍となる。以後、正元元年（一二五九）の退位まで仕えた。妹後深草院少将内侍の没後に出家。

宝治元年『院御歌合』、『宝治百首』、建長三年『影供歌合』などに出詠。勅撰集には『続後撰和歌集』以下、四五首入集。連歌作者としても活躍した。著作に『弁内侍日記』がある。

安嘉門院甲斐

生没年未詳。長有朝臣妹か。『尊卑分脈』には真観の弟である定嗣女に「安嘉門院女房」がみえる。

勅撰集には『続後撰和歌集』以下、七首入集。

能暹法師

生没年・経歴未詳。仁和寺法師か。『尊卑分脈』には藤原季兼の子孫、隆暹男とみえる。なお、福田秀一氏は「鎌倉中期歌壇史における反御子左派の活動と業績（上）」（『国語と国文学』41巻8号・昭和39年8月→『中世和歌史の研究』《昭和47年・角川書店》）で別の能暹を指摘する。

【右方】

沙弥蓮性

藤原知家。正三位藤原顕家男。母は伊予守源師兼女。行家の父。寿永元年（一一八二）生。建久四年（一一九三）叙爵、中務少輔、左兵衛佐、中宮亮を経て、寛喜元年（一二二九）正三位に至ったが、嘉禎四年（一二三八）病により出家。

正嘉二年（一二五八）没、七七歳。

正治二年『石清水若宮歌合』、『建保名所百首』、『洞院摂政家百首』、貞永元年『光明峰寺摂政家歌合』などに出詠。定家を師事し、『明月記』には、定家の許を訪れ「依和歌数奇」り歓談する（承元元年八月一一日条）など、交流の記事がみえる。定家没後も、『河合社歌合』や『新撰六帖題和歌』に出詠するなど、為家と協調していたが、次第に不満を抱き、寛元四年『春日若宮社歌合』を催行、判者を勤めたのを境に真観らとともに反御子左派を結成して対立した。宝治元年『院御歌合』では為家判を不服として後嵯峨院に『蓮性陳状』を奉っている。『宝治百首』、建長三年『影供歌合』などに出詠。勅撰集には『新古今和歌集』以下、一二〇首入集。

沙弥真観

藤原光俊。権中納言藤原光親男。母は順徳天皇の乳母経子。妹に鷹司院按察。建仁三年（一二〇三）生。幼少時から順徳天皇に出仕。承久二年（一二二〇）右少弁、正五位下。承久の乱で父が処刑され、自らも筑紫に配流されるが、翌年には帰洛。嘉禎元年（一二三五）右大弁、正四位下に至る。翌年にわかに出家。建治二年（一二七六）七四歳で没したとされるが、これには異説もある。

嘉禄元年（一二二五）頃より藤原定家に師事。真観が送った歌合に、定家が勝負付をして返す（『明月記』嘉禄元年四月三日条）などのやり取りがみえる。寛喜四年『石清水若宮歌合』、『洞院摂政家百首』などに出詠。為家とは共に『新撰六帖題和歌』を詠むなどしたが、次第に不満を抱き、蓮性らと共に『春日若宮社歌合』を催行、以後、反御子左派として対立した。その後は『宝治百首』に出詠、『万代和歌集』、『現存和歌六帖』を撰した。信実とは親しかったようで、建長三年『閑窓撰歌合』を共撰している。また、文応元年（一二六〇）末から鎌倉将軍宗尊親王の歌道師範となり、その威勢を背景に『続古今和歌集』の撰者に加えられ、文永二年（一二六五）末に『続古今和歌集』を奏覧。翌年宗尊親王が将軍を廃せられるとともに一旦失脚するが、為家の没後歌壇に復帰、建治二年（一二七六）には『現存三十六人詩歌』を撰んでいる。勅撰集には『新勅撰和歌集』以下、百首入集。

少将弟

後深草院少将内侍。藤原信実女。藻壁門院少将・後深草院弁内侍の妹。生没年未詳。父信実に先立って、文永二年（一二六五）以前没したか。寛元四年（一二四六）から正元元年（一二五九）まで弁内侍とともに後深草天皇に仕える。宝治元年『院御歌合』、『宝治百首』、建長三年『影供歌合』、同『閑窓撰歌合』などに出詠。勅撰集には『続後撰和歌集』以下、四五首入集。

正親町院左京大夫

生没年未詳。土御門天皇皇女正親町院覚子のもとに出仕。

勅撰集には『続拾遺和歌集』以下、五首入集。

前丹後守藤原永光

上西門院蔵人藤原成時男。一説には藤原邦兼男。生没年未詳。順徳院近臣。左兵衛権少尉などを経て、五位、丹後守、木工頭に至る。『明月記』には定家邸へ訪問の記事も散見し、交流が確認でき、歌会や連歌会でも、たびたび同席している。建保元年『内裏歌合』などに出詠。勅撰集には『新勅撰和歌集』以下、一〇首入集。

左近衛権中将藤原朝臣為氏

為家一男。母は宇都宮頼綱（蓮生）女。弟に為教。貞応元年（一二二二）生、嘉禄二年（一二二六）叙爵以後、侍従、左少将、従四位上右中将など順調に昇進。建長三年（一二五一）正四位下で参議、文応元年（一二六〇）正二位。文永四年（一二六七）権大納言に至る。弘安九年（一二八六）没。六五歳。

二条家の祖。父為家の指導を受け、その後継として成長した。歌合への出詠は『河合社歌合』が初めてと思しい。宝治元年『院御歌合』、建長二年『仙洞詩歌合』など多くの歌合に出詠。『宝治百首』、『白河殿七百首』、『弘長百首』、『弘安百首』にも召されている。亀山上皇の信任と庇護を受け、上皇の勅を奉じて弘安元年『続拾遺和歌集』を奏覧した。『現葉和歌集』（散佚）の撰者。異母弟為相の成長とともに父為家との関係が悪化したほか、弟為教とは反目しあっていた。

勅撰集には『続後撰和歌集』以下、二三二首入集。『大納言為氏卿集』（他撰）がある。

沙弥円空

立信か。建保元年（一二一三）生、弘安七年（一二八四）没、七二歳。西山派の祖証空の弟子。山城深草に真宗院を開き深草流を立て、西山教義を広め、後深草天皇や貴族達の帰依を得た。往生院、遺迎院、誓願寺に歴住したのち真宗院に帰院。『井蛙抄』雑談に「信実入道、九月尽日、好士あまたさそひて、深草立信上人許にまかりて、連哥侍りける」、「冷泉亜相為氏、秋比立信上人の深草の寺にて、連哥をせられける」などの記述がみえ、信実や為氏との交友が窺える。勅撰集には『続拾遺和歌集』以下、五首入集。園基氏（法名、円空）が同時期に存在し、こちらを作者とする説もある（福田秀一氏「鎌倉中期歌壇史における反御子左派の活動と業績（上）」『国語と国文学』41巻8号・昭和39年8月→『中世和歌史の研究』〈昭和47年・角川書店〉）。

散位藤原朝臣行家

知家男。貞応二年（一二二三）生。従二位、左京大夫に至る。文永一二年（一二七五）没。五三歳。父蓮性や真観が反御子左派を結成すると、これに従い、寛元四年『春日若宮社歌合』に出詠した。建長八年『百首歌合』の判者を勤めたほか、『宝治百首』、『弘長百首』、『白河殿七百首』、文永二年『亀山殿五首歌合』などに出詠。『続古今和歌集』の追加撰者となる。『人家和歌集』撰集も行っている。勅撰集には『新後撰和歌集』以下、八〇首入集。

散位藤原朝臣為綱

左京大夫藤原隆範男。母は正三位藤原季能女。生没年未詳。文永二年（一二六五）頃生存。正四位下、中務大輔、左京大夫、少納言。弘長三年『住吉社歌合』などに出詠。信実の甥、定家の異父兄隆信の孫で、為家の甥にあたる。『明月記』によると、「未時許隆範朝臣相具少納言為綱来臨、初見之」（嘉禄元年一一月二十日条）とあり、為家の任参議に「来賀」している（嘉禄二年四月二三日条）。勅撰集には『続後撰和歌集』以下、一二首入集。

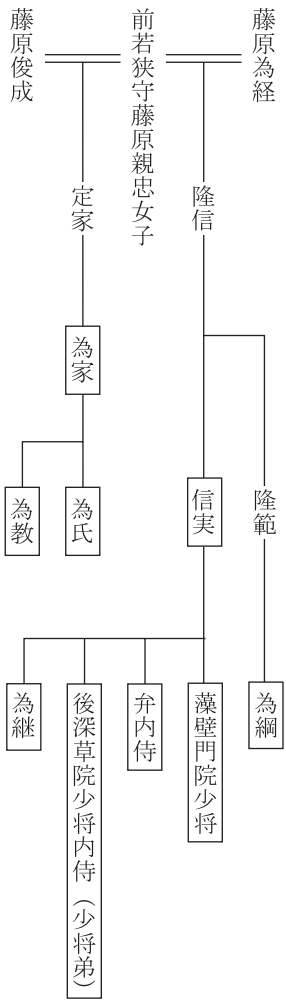
中務大輔藤原朝臣為継

信実男。建永元年（一二〇六）生か。従三位に至る。文永二年（一二六五）没、六〇歳。父信実と同じく、御子左派、反御子左派のどちらにも属さぬ中立派であった。寛喜四年『石清水若宮歌合』、寛元四年『春日若宮社歌合』、『宝治百首』、建長三年『影供歌合』などに出詠。勅撰集には『続後撰和歌集』以下、一八首入集。

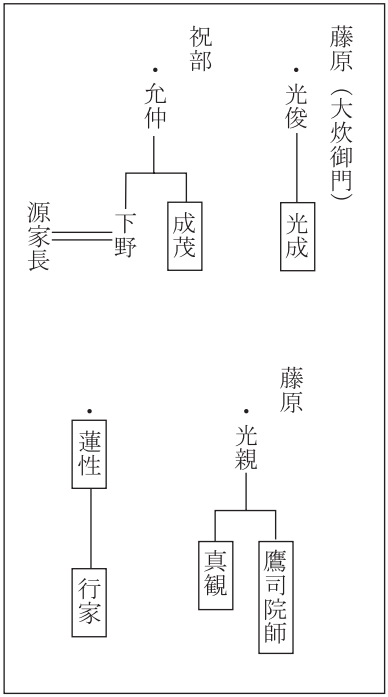
歌人たちは、定家の血縁にあたる者、定家と親交があった者及びその親類を中心に構成されており、定家・為家との親交が深く、『河合社歌合』出詠の勧進を行った信実が、為家とともに出詠歌人の人選に関与していたことが推測される。

以下、参考に『河合社歌合』出詠者を中心とした関係図並びに『河合社歌合』勝敗表を示す。なお、関係図のうち、四角囲みは『河合社歌合』出詠歌人。

参考一、人物関係図



定家と交流



参考二、『河合社歌合』勝敗表

勅撰集	左右	歌人（年齢）	番	冬月	番	千鳥	番	不遇恋	勝負持
新勅撰	左	為家（46歳）①②	1	×	11	×	21	×	0
新古今	右	蓮性（62歳）①②		○		○		○	3
新勅撰	左	信実（67歳か）①②	2	×	12	△	22	×	0
新勅撰	右	真観（41歳）②		○		△		○	2
×（続後撰）	左	光成（未詳）	3	△	13	△	23	△	0
×（続後撰）	右	少将弟（未詳）①②		△		△		△	0
×（続後撰）	左	為教（17歳）①	4	△	14	△	24	×	0
×（続拾遺）	右	正親町院左京大夫（未詳）		△		△		○	1
新古今	左	成茂（64歳）②	5	○	15	△	25	×	1
新勅撰	右	永光（未詳）		×		△		○	1
×（続後撰）	左	鷹司院兵衛督（未詳）②	6	△	16	○	26	○	2
×（続後撰）	右	為氏（22歳）①②		△		×		×	0
新勅撰	左	藻璧門院少将（未詳）	7	△	17	○	27	△	1
×（続拾遺）	右	円空（31歳）		△		×		△	0
×（続後撰）	左	春宮弁（未詳）①②	8	△	18	×	28	△	0
×（新後撰）	右	行家（21歳）②		△		○		△	1
×（続後撰）	左	安嘉門院甲斐（未詳）	9	×	19	○	29	○	2
×（続後撰）	右	為綱（未詳）		○		×		×	1
×（未詳）	左	能運（未詳）	10	×	20	×	30	○	1
×（続後撰）	右	為継（38歳）②		○		○		×	2

注1―「勅撰集」欄の内、『河合社歌合』成立以前の勅撰集に入集している場合にはその勅撰集名を、入集していない場合には×を付け、（　）内に『河合社歌合』以降初めて入集した勅撰集の名を記した。
注2―「歌人」欄の内、年齢は『河合社歌合』催行時点のもの、　　は『春日若宮社歌合』に出詠していることを、①は『院御歌合』に、②は『宝治百首』に出詠していることを示す。
注3―○は勝、×は負、△は持を示す。

（吉井佐織）

4．歌題とその構成について

『河合社歌合』は三題三〇番に、判者による巻末歌を加えた計六一首から成る歌合である。歌題は「冬月・千鳥・不遇恋」の三題。この項では、当該歌合の三題と先行する歌合の設題を比較し、当該歌合の特徴や、「冬月・千鳥・不遇恋」の三題を設定した背景を探りたい。

まず先行する神社歌合の歌題と催行年月を以下に一覧した。調査に際しては、『新編国歌大観』第五巻並びに第十巻掲出の歌合を主な調査対象とし（番号は「新編国歌大観」に拠り、十巻所収の歌合は、番号を四角枠で囲んだ）、適宜他資料により追加した。なお、歌題や催行年月が明確でないものは調査対象から外した。

102 気多宮歌合（延久四年三月）
松・榊・鶯・鹿・桜・紅葉・卯花・雪・郭公・千鳥

149 西宮歌合（大治三年八月）
月〈寄述懐〉・紅葉〈寄昼〉・鹿〈寄暁〉・虫〈寄夕〉・萩〈寄恋〉・女郎花〈寄恋〉・薄〈寄恋〉・荻〈寄恋〉・蘭〈寄恋〉・菊〈寄祝〉

150 南宮歌合（大治三年九月）
月〈述懐〉・紅葉〈昼〉・鹿〈暁〉・虫〈夕〉・萩〈恋〉・女郎花〈恋〉・薄〈恋〉・荻〈恋〉・蘭〈恋〉・菊〈祝〉

151 住吉歌合（大治三年九月）
月〈述懐〉・紅葉〈寄昼〉・鹿〈寄暁〉・虫〈夕〉・萩〈恋〉・をみなへし〈恋〉・薄〈恋〉・荻〈恋〉・蘭〈恋〉・菊〈寄祝〉

160 住吉社歌合（嘉応二年十月）
社頭月・旅宿時雨・述懐
162 広田社歌合（承安二年十二月八日）
社頭雪・海上眺望・述懐
163 三井寺新羅社歌合（承安三年八月十五夜）
遙見山花・古郷子規・湖上月・野宿雪・談合友恋
167 別雷社歌合（治承二年三月十五日）
霞・花・述懐
174 若宮社歌合（建久二年三月）
山居聞鶯・松間梅花・寄祝言恋
182 石清水若宮歌合（正治二年）
桜・郭公・月・雪・祝
191 石清水社歌合（建仁元年十二月）
（社頭松）・（月前雪）・旅宿嵐
200 石清水若宮歌合（元久元年十月）
初冬・時雨・寒野
201 北野宮歌合（元久元年十一月）
時雨・忍恋・羈旅
202 春日社歌合（元久元年）
落葉・暁月・松風
205 鴨御祖社歌合（建永二年三月）
山家朝霞・湖辺夕花・社頭述懐
206 賀茂別雷社歌合（建永二年三月）
海辺帰雁・暮山春雨・社頭夜風
65 歌合（建保五年四月廿日）
羈旅郭公・河辺夏草・寄松述懐
70 日吉社大宮歌合（承久元年九月）
深夜秋月・遠山暁霧・社頭松風
71 日吉社十禅師歌合（承久元年九月）
暮天聞雁・紅葉添雨・湖上眺望
220 石清水若宮歌合（寛喜四年三月）
河上霞・暮山花・社述懐
73 日吉社知家自歌合（嘉禎元年十二月）
春・夏・秋・冬・述懐

一覧すると、まず三題という題数については、先行する歌合にも往々にして確認できる。一方で、当該歌合のように、季題二＋恋題一という組み合わせは、少なくとも今回の調査の中では殆ど例がみえず、僅かに『若宮社歌合』（建久二年三月）の「山居聞鶯・松間梅花・寄祝言恋」三題がそれに該当する。

また、神社歌合全体の傾向として、社頭にまつわる題が散見することが挙げられ、当然のことながら歌合が催される場（神社）の神性が重視されていたことが窺える。そのような傾向と比較すると、当該歌合で神社に直接関わるような設題がなされていないことは注意される。

次に、神社歌合では月が非常に多く歌題に取られていることが窺え、当該歌合もこの設題傾向と重なる。これに関連して、渡部泰明氏は「夜の闇を照らす月は、何よりもまず神とみなされ」、「なにより月の美は、信仰心と密接に結び付いて言挙げされ」、「神仏の超越性になぞらえられる」と指摘されており、[3] 神社という神聖な場で月が歌題として選択されることはごく自然なことであったと思われる。

では、次に当該歌合の三題それぞれについて設題の観点から確認しておこう。

まず「冬月」だが、特に「冬」としたのは、『河合社歌合』が催された一一月の当季に沿ったためと思われる。歌合と当季の関係性については『八雲御抄』に「凡時景物は有之　過は不可然事也」（作法部　六．出題）とみえる。また、田渕句美子氏は「当季という要素は、歌題の出題（設題）に対して、強い影響力を有しており、題詠の時代においても、重要な要素として底流していると思われ」、「中でも奉納歌合や影供歌合、御幸の和歌会などの季題は、多く当季の歌題となる」と指摘されており、[4] 当該歌合もこれに一致する。また、賀茂と月は「かもがはのみなそこ見えてる月をゆきてみんとや夏ばらへする」（『家持集』六九・「夏歌」）などのように、古来から多く詠じられており、さらに、「いしかはやせみのを川のきよければ月もながれを尋ねてぞすむ」（『新古今和歌集』神祇歌・一八九四・「鴨社歌合とて人人よみ侍りけるに、月を」・長明）など、「月」が賀茂の神を暗示する例もみえる。

次の「千鳥」も当季に沿うものとして設題されている。また、千鳥は川に群れる鳥である。河合社近くを流れる賀茂川と千鳥という組み合わせでは、「あけぬなりかものかはせにちどりなく今日もはかなくくれむとすらん」（『後拾遺和歌集』雑三・一〇一四・「中関白のいみに法興院にこもりてあか月がたにちどりのなき侍りければ」・円昭）、「ちはやぶ

るかもの河瀬にすむ千鳥ゆふかけてこそなき渡るなれ」（元永元年『内大臣家歌合』千鳥・六番左・一一・定信）などと詠じられており、歌合の奉納先である河合社にちなんだ設題といえよう。

次の「不遇恋」だが、吉海直人氏に河合社付近の糺の森について、「糺」に糾明する意の「ただす」を掛けて詠まれることが多く、そのためにほとんどの歌が男女の恋の誓いを題材にしている（当然「不逢恋」が多くなる）。」との指摘がみえ、[5] 河合社にちなんだ設題は、「不遇恋」にも該当するものと思われる。

（吉井佐織）

6．他書所伝

『河合社歌合』出詠歌のうち、他書に収録されたものを成立順に示す。なお、『河合社歌合』本文との間で異同の存する箇所には傍線を付した。

十二番左　霜さゆるつつみのうへのかはむかひをち方きけば千鳥啼くなり

↓『信実集』冬歌・一〇六・「家にすすめ侍りし河合のやしろの歌合に、千鳥」

九番右　そのかみをおもひぞいづるやまあゐの袖にもなれし冬のよのつき

↓『万代和歌集』神祇歌・一五九五・「河合社歌合に、冬月を」・藤原為綱朝臣

二十四番右　わがこひはなだかのうらのなびきものこころはよれどあふよしもなし

↓『万代和歌集』恋歌一・一八五〇・「河合社歌合に」・少将内侍

二十八番左　こひしなんいのちをいつのためとてかあふにかへずはのこしとどめむ
↓『万代和歌集』恋歌二・一九六五・「不逢恋といふことを」・弁内侍

二十四番右　我が恋はなだかの浦のなびきもの心はよれどあふよしもなし
↓建長三年『閑窓撰歌合』卅八番左・七四・少将内侍

十二番左　しもさゆるつつみのうへのかはむかひをちかたきけばちどりなくなり
十四番左　ふゆきてはかぜやさむけきかはちどりながきしも夜にいまぞなくなる
↓『現存和歌六帖』八三五・八三七・「（ちどり）」・信実朝臣、藤原為教朝臣

二十七番左　あふまでのこひにいのちのながらへばうきをかぎりのよをやつくさん
↓『続古今和歌集』恋二・一〇六五・「題不知」・藻璧門院少将

二十四番右　わがこひは名だかの浦のなびきもの心はよれどあふよしもなし
↓『続拾遺和歌集』恋歌二・八三七・「題しらず」・院少将内侍

九番右　そのかみを思ひぞいづる河あひのなみにもなれし冬のよの月
↓『歌枕名寄』一六四六・「河合　七瀬之内／万代」・為綱

九番右　その神をおもひぞ出づる河あひの神にもなれし冬の夜の月
↓『夫木和歌抄』雑部十六・一六〇二九・「河合の神、山城／題不知」・為綱卿

二番右　おき出でてまたこそみつれ冬のよにすみかへりたる山のはの月（真観）
三番右　冬くれば月のかつらも木枯にまばらなればや影のさびしき（少将弟）
六番左　ときはなる木のはがくれはかはらねど月は冬こそさえまさりけれ（兵衛督）
六番右　敷妙の衣手さむし冬のよの雪げさえたる山のはのつき（為氏）
七番右　おしなべてあまてる月のかつらにも冬はさびしき影やそふらん（円空）
八番左　木がらしの吹きもたゆまぬ夕ぐれに山のはさむく出づる月かげ（春宮弁）
八番右　冬河の袖まで月のかげさえて下行く水も猶こほりつつ（行家）
九番左　霜雪の色もひとつにさゆれども跡こそみえね庭の月影（安嘉院甲斐）
↓『題林愚抄』冬部中・冬月・五三八八～五三九五・「河合社歌合」

十六番右　くれ行けば夕浪千鳥声たてて河風さむみ今ぞなくなる（為氏）
十二番左　霜さゆるつつみのうへの河むすび遠かた聞けば千鳥鳴くなり（信実朝臣）
十七番右　よをさむみはがひの霜やかさぬらんあらひもあへぬ千鳥鳴くなり（円空）
十八番右　おきつ風あらいそ波のいやましにたつことやすきさよ千鳥かな（行家）
十九番右　よをさむみ氷る汀のむら千鳥おのれや浪に立ちかはるらん（安嘉門院甲斐）
↓『題林愚抄』冬部中・千鳥・五四六八～五四七二・「河合社歌合」

二十一番右　風あらきうらのとまやにたつ煙心やすくはなびきやはする（知家入道蓮性）
二十二番右　身はすてつ今はこの世にあふことをなににかへてか恋ひわたるらん（真観）
二十六番左　かりにだによる舟もなし波たかき浦のみるめの下のみだれは（鷹司院兵衛督）
二十六番右　思ひわびつらさのままに恋ひしなばこの世はさても後ぞかなしき（為氏）
二十八番左　恋ひしなん命をいつのためとてかあふにかへずはのこしとどめん（弁）
二十八番右　ほしわびぬわが心なるなみだだにたがゆかりとてつれなかるらん（行家）

二十九番左　おもひねのよなよなかよふ夢ならでなどかうつつの道なかるらん（甲斐）

↓『題林愚抄』恋部一・不逢恋・六五四五～六五五一・「河合の歌合」

二十一番左　君だにもねてとたのめばもろこしの虎ふすのべにもも夜なりとも（為家）

↓『題林愚抄』恋部四・寄獣恋・七九六五・「河合社歌合」

勅撰集には『続古今和歌集』、『続拾遺和歌集』に二首が入集する。『続古今和歌集』の撰者四人のうち為家・真観・行家の三人並びに『続拾遺和歌集』の撰者為氏は当該歌合の出詠者。また、真観撰とされる『万代和歌集』、『現存和歌六帖』（共に後嵯峨院へ奏覧）には五首入集している。他書所伝のうち、『河合社歌合』出詠歌人が成立に関与した歌集に限ってみれば、為綱を除いてその殆どが反御子左派歌人もしくは中立派歌人の詠が撰入されている。

なお、当該歌合二十四番右歌が入集する建長三年『閑窓撰歌合』は当該歌合出詠者でもある真観と信実が共催した歌合で、両家の女流歌人の歌を撰び、結番したものである。二十四番右歌は、『閑窓撰歌合』には少将内侍作として撰入するが、本来の出詠者は正親町院左京大夫。二十四番右歌は、『万代和歌集』、『続拾遺和歌集』でも同様に少将内侍作とされている。この内、『万代和歌集』は詞書きに拠れば、『河合社歌合』を撰集資料とするが、同歌を少将詠とする『河合社歌合』の伝本は今のところ確認されず、不審が残る。また、『続拾遺和歌集』の詞書きには「題しらず」とみえ、両集とも『河合社歌合』を直接の撰集資料としていない可能性も考えられる。『閑窓撰歌合』の誤伝との関連も気になるところだが、『河合社歌合』享受のさらなる実態解明は、今後の課題としたい。

（吉井佐織）

〔注〕

（1）『藤原為家全歌集』（二〇〇二年　風間書房）以下にあげる佐藤氏の指摘は全てこの著書に拠る。

（2）安井久善氏は行家の勅撰集入集歌数について「勅撰集入集歌は続後撰集以下八十首である。作者部類では八十二首であるが、新後撰集1523は大蔵卿行宗の誤りであり、新続古今集707は「承久元年七月歌合」としており、行家出生以前のことになるので、一応この二首は除外した。」と指摘される。『宝治二年院百首とその研究』（昭和四六年）「宝治二年院百首作者伝」参照。

（3）『歌ことば歌枕大辞典』「月」項（平成十一年　角川書店）参照。

（4）『鎌倉前期の歌合・和歌会における当季』「早稲田大学教育学部　学術研究（国語・国文学編）」第58号（二〇一〇年二月）

（5）注（2）掲出「糺の杜」項参照。